



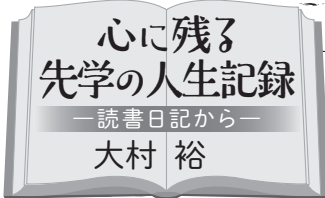
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.247  
2024.4.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第39回

### 稲生典太郎『暖かい本』

(沖積社 1986年)

本書は、恩師・稲生典太郎先生(1915~2003)のエッセイ集である。先生は日本近代外交史の碩学であられたが、青春時代は考古学研究に没頭し、特に「北方考古学」に編年学的手法を導入して将来を嘱望された学徒であった。種々の理由により斯学から離れてしまったのは、極めて残念なことであった。この本は、丁度中央大学を定年退職した時点で刊行されたものである。内容は、先生の最大の趣味である古書蒐集に関わるエッセイが中心となっている。古書店歩きが趣味の一つである私にとって、参考になるところが多い。それはともかく、ここに書かれたエッセイから、著者の研究者としての半生をたどってみたい。なお、本書は自伝ではないから、詳細な履歴はもちろん書かれていない。足りない部分は『白門考古論叢—稲生典太郎先生追悼考古学論集—』(中央考古会ほか2004年)に再録された稲生先生の年譜やご自身による回想文(「オロンスムの思い出」)等から適宜補って行くことにする。

稲生典太郎は、東京府・芝にて1915(大正4)年出生。先祖は幕臣であったという。1933(昭和8)年、國學院大學予科に入学。ここから学部卒業に至るまで、大場磐雄の指導を受けつつ、外では山内清男の指導を親しく受けている。山内は周知のように、「大変な癩癩持ち」で、それが「恐くて縁遠くなってしまった者も」あったが、稲生とは不思議とウマが合い(ご本人は、古書蒐集の趣味が一致し、専攻が異なっていたから「雷」を受けずに済んだと私に語っていた)、稲生宅にもしばしば訪問して稲生の母堂の手料理をごちそうになったという(「『日本遠古之文化』とその著者」)。大学在学中は、福島県郡山市付近の祭祀遺跡の発掘、千葉県曾谷貝塚の発掘、同県菅生低湿地遺跡の発掘等に從事している(「大場先生のこども」)。卒論には、オホーツク式土器を取り扱う。論題は「日本北方文化史序説」であった。資料収集のため、樺太に2回、北海道に4回調査旅行を敢行している。この折、『北方文化の考古土俗学』(岩田書院 1997年)によると、北海道大学農学部附属博物館の名取武光や函館図書館の「岡田先生」から各々、「ここに就職して勉強しないか」と勧められたという。

さて、学部を卒業する1938(昭和13)年の春先のこと、山内清男と神保町厳松堂のあたりを歩いていたところ、電車道(大村註:路面電車道)の向こうから、「おおい、山内」と声をかける人がいた。東洋考古学の江上波夫である。三人で近くの喫茶店で談笑するうち、江上が「近く蒙古に行く予定だが、一緒に行かないか」と稲生に誘いがあり、これに随行することになったという(「オロンスムの思い出」)。同年、徴兵検査を受けるも、「丙種合格」(身体上種々の欠陥があり、現役に適しないが国民兵役に適する者)となり、「赤紙」(軍からの召集令状)が来ることを免れる。先生によると、検査官から「貴様は大学を卒業したら何をするのか」と問われたので、「内蒙古の遺跡の調査に行く予定であります」と返答したところ、「お国に対する奉公の仕方は色々ある」と言って敢えて「丙種合格」と

してくれたという(大村聞き取り)。当時、軍部は海外植民地などでの文化工作(宣撫工作)の一環として、考古学的調査に協力的であったから、こうした判断が下されたのであろう。しかしこの調査が皮肉にも考古学研究から離れる転機となってしまふ。オロンスム遺跡の調査終了後、帰国することをせず、蒙古張家口の「蒙疆学院」助教に就任。しかし「大東亜戦争」が勃発すると、身辺に脅威を感じたのか、中国に向かい、橋川時雄(中国古典文学者)の世話で、北京の「新民学院図書館」の未整理図書の一部(清朝時代、日本に留学した学生たちが持ち帰った明治時代の和書)の整理に従事する。これが日本近代史転向の契機となるのである。この仕事を続ける傍ら、永井潜(国立北京大学医学院首席教授)の世話で北京大学医学院の日本語講師に就任している。色々なところで有力者に目を掛けられているのは、稲生の温厚・誠実な人柄によるものであろう。北京では、燕京大学教授の鳥居龍蔵と交流。このことを山内清男に報せると、「鳥居先生の昔話をよく聞いておくように」という指示があったという(大村聞き取り)。

北京では、仕事と読書三昧の日々を送る一方、市内の古書店巡りを始める。古書店のオヤジたちにも可愛がられ、入れ替わり立ち代わり仮寓先に書物を売りにきたという。結果、清朝末期から民国初年の政治意見書・義和団事変や辛亥革命の資料が陸續として書架を埋めることになる(総数1万数百冊)。これらは、敗戦後の引き揚げの際、一冊の本の携行も許されなかったので、現地で処分したが、それらの中には、東洋文庫の蔵書にも数冊しかない稀覯本も含まれていたという(「集書と散書の回想」「北京・八月十五日前後」)。

1945(昭和20)年8月末日、北支駐屯軍参謀本部から出頭命令が来る。連合国軍との折衝のため、中国語・英語・日本語の通訳になれるというのである(「北京・八月十五日」)。この仕事を6か月間勤めた後、1946(昭和21)年3月に帰国。半年間無為に過ごすか、「内藤先生」の口利きで、一時外務省官房文書課記録班の嘱託となる。しかしこれもGHQの命令による大量解雇の対象(1945年8月以降採用の嘱託等解雇)となったため2年で辞め、開成学園・日大三高・城西予備校・中央大学・國學院大學の非常勤講師等をして糊口をしのいだという。そして1959(昭和34)年、ようやく中央大学の専任講師となり(その後助教授、教授に昇進)、生活の安定を得ることとなったのであった。なお1961(昭和36)年には「条約改正論の歴史的研究」を國學院大學に提出して博士の学位を取得している(46歳)。まさに波瀾万丈の半生であった。

私が2003年8月、山内清男博士について稲生先生に取材した折、先生が山内考古学の真髓を深く理解しておられたことに一驚した記憶がある。先生が日本近代史に転向しないでそのまま考古学研究に専念して居られたならば、深い教養に裏付けられたユニークな研究成果を次々に挙げられたのではないかと、一考古学徒としては残念に思うのである。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第39回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第240回)	味噌井拓志 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第14回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚「釈迦空全歌集」	牧野 令 …4

## 考古学の履歴書

## 考古学とともに歩む(第14回)

山本 暉久

## 14. 大学院での考古学 その3

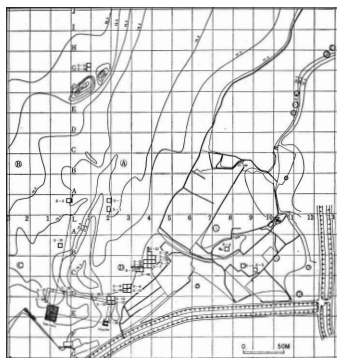
## -エジプト・マルカタ遺跡の調査に参加②-

1971(昭和46)年11月15日(月)~1972(昭和47)年4月4日(火)までの約5箇月近くの長い間、エジプトで過ごすこととなった。マルカタ遺跡での発掘期間は、1972年1月6日~2月28日までの約1箇月半程であったが、先発隊として、本隊が到着するまで、カイロにて準備、発掘終了後は、再びカイロに戻り、後片付けや整理作業にあたり、本隊帰国後も船便の手配などで過ごして4月初めに帰国することとなった。以下、この間のエジプトでの生活や発掘成果などについて記してみたい。

東京とカイロの時差は7時間で、11月15日17時羽田空港発、11月16日現地時間7時20分(日本時間14時20分)カイロ空港着と21時間の長旅であった。空港で吉村作治さんの出迎えをうけ、カイロ近郊のヘリオポリス(Heliopolis)にある、吉村さんの奥さんの実家で泊後、翌日カイロ市内のGarden City House Hotelに約1週間滞在し、日本大使館やエジプト考古局への挨拶など、吉村さんの案内で過ごし、この間カイロ博物館やギザの大ピラミッドなどを見学した。とくに、カイロ博物館所蔵のツタンカーメン王墓出土品の豪華さと豊富さに圧倒された。吉村さんは、本隊の宿舎として使用するアパート探しに奔走し、ようやくナイル川に挟まれた Gezira( Gezira)島のザマレク(Zamalek)にあるマンションの一室を賃借し、ここを早稲田ハウス(Waseda University Institute)とすることとなった。食事は基本的に自炊で、食事当番は内藤とわたし(皿洗い専門)が担当することとなった。11月28日には船便で送った、ジープやコンテナの到着状態を確認のため、アレクサンドリア港税関に向かい、ようやくジープとコンテナに入れた一部の機材を入手することができた。12月2日には、船便で別送したすべての機材が早稲田ハウスに到着した。

こうして、本隊受け入れ準備が着々と進むこととなった。しかし、わたしは12月初めころから風邪にかかり、喉の腫れや咳・発熱が続き、なかなか治らず年末年始と体調が悪化して閉口することになってしまった。12月16日、早朝(明け方)、本隊の川村隊長、中島・稲葉隊員がようやく到着し、櫻井先生は遅れて23日に到着し、これで隊員7名が揃うこととなった。

12月25日、エジプト航空にてルクソールに向かい、現地到着後、宿舎のルクソールホテルに到着し荷ほどき後、ルクソール考古局で、今回の我々の調査に立ち会うInspectorのヒンジ(Hingy)と対面し、フェリーで西岸に渡り、今回の調査の宿舎となるカーターハウスに機材を運び込んだ。この宿舎は、かの著名なツタンカーメン王墓を発掘したイギリスの考古学者ハワード・カーター(Howard Carter)が実際に使用していた建物で、歴史ある建物に調査中宿舎として利用することができたのは感慨深いものがあった。その後、



▲マルカタ遺跡調査区 ORIENT VOL.IX 1979

ジープでマルカタ遺跡現地に向かい、遺跡の現状を確認後、26日、再びカイロに戻る。29日には、ギザの大ピラミッド、30日にはサッカラ(Sakkara)のステップピラミッドなどを見学した。かくして、1971年は異国の地で暮れようとした。

年が明けて、1972年1月4日、エジプト航空でルクソールへ向かう。いよいよ発掘の開始が迫ってきた。当日は東岸のホテルに宿泊し、エジプト側と会食した。ところが翌日、全員が極端な下痢症状となってしまった。どうもアイスクリームにあたってしまったらしい。それでもなんとか西岸に渡り、6日から発掘が開始された。毎朝6時起床、朝食後宿舎出発、8時に作業を開始し14時ころ作業終了、その後宿舎にて昼食、午睡後、ミーティング、夕食というのが日々のルーティーンであり、冬とはいえ、直射日光は強く、午前中を中心とする作業であった。朝・晩は缶詰中心の軽食で、昼食がメインで、現地でコックを雇って食べるようになった。朝出かけるとき、庭でニワトリがバタバタしていると、今日は鳥料理か、羊がメーメーと鳴いていると、羊料理かと、わかりやすい昼食メニューであった。ただ、朝・晩の缶詰料理は、付き添いのInspectorには不満のようであった。

ナイル河畔のローマ時代のイシス神殿近くのナイル河畔寄りにグリッド(5×5m)を設定し、発掘を開始した(調査区地図参照)。早くもローマ神殿に付属する日干しレンガで四角く囲まれた、住居跡が検出されはじめた。エジプトの調査は現地で雇い入れた作業員を指揮する熟練工(Skillfull Worker)が中心となって実施されるもの(これに協力するWell-rraining workerが加わる)で、我々が直接鍬や移植ごてを用いることはなく、良い面もあるが、日本の発掘に慣れた私からすると、細かな調査、たとえば、出土遺物の原位置記録などは不可能で、破片遺物はすべて土砂とともに掘り上げ、フルイにかけて、そこから採集されることとなる。ローマ時代の完形土器などは、そのままグリッドに残るが、困ったのは、下層の砂礫中から出土した、旧石器時代末の細石器の類いで、原位置での記録は全く不可能であった。これに対して、厳密に要求されるのは、取りあげた遺物をすべて台帳に登録することであった。これは、遺物の国外持ち出しを防ぐ目的で、長年のエジプトでの欧米の発掘により遺物が多量に国外に持ち出されたことに対する反省によるものであり、調査期間中、Inspectorの立会のもと、登録台帳作成が行われることとなった。

今回で、調査成果など書き終えることができなかつたので次回に続きを記すこととする。

## 略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月~1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月~2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英式記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月~2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。



## リレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 240

## 安養寺跡 ～三重県多気郡明和町

味噌井 拓志

安養寺跡は、三重県多気郡明和町大字上野に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。寺伝によれば、鎌倉時代の永仁5年(1297)に頼暹権律師が癡兀大恵を開山に招き創建したとされる。安養寺は臨済宗東福寺派に属し、五山十刹に次ぐ諸山に列せられる寺院であった。室町時代には伊勢国司の北畠氏から手厚い保護を受け発展したが、天正4年(1576)に織田氏の伊勢侵攻で当寺にも兵火が及び焼失したとされる。寺域は百間四方に及び、周囲に堀が巡らされた大伽藍であったという。なお、開山である癡兀大恵は伊勢国出身で、元は天台宗で密教を修めたのち、臨済宗の東福寺開山の円爾との法論で感化され、自身も東福寺の第九世となっている高僧で、正和元年(1312)安養寺の方丈において示寂し、諡号仏通禪師を送られている。

安養寺の跡地には、昭和18年まで開山塔が残っていたが、昭和19年に陸軍亀山病院の分院が建設され、戦後も医療施設として土地利用がなされてきた。そのため、遺構の遺存状態は必ずしも良好ではない。しかし、医療施設の建設に伴う平成11年(1999)の第1次調査を皮切りに、第8次におよぶ発掘調査(町以外にも三重県埋蔵文化財センターも実施)が実施され、おぼろげながら安養寺の様子がわかってきている。しかし、これまでの調査面積は広大で、出土した遺物もコンテナボックスで750箱以上と膨大であることから、整理および報告書の刊行が課題である。以下、発掘調査から分かってきた安養寺の状況を時代毎に概述する。

1. 創建以前：古代の竪穴建物や掘立柱建物が確認され、硯や緑釉陶器などの出土遺物も確認されることから、伽藍の造営以前に官衙的な施設が立地していた可能性がある。
2. 創建期(13～14世紀)に溯り得る遺物(特に瓦)が少なく、開山当初から整然とした伽藍配置がなされていたかは不明瞭である。
3. 15～16世紀代になると、幅4m、深さ2mの堀とも呼べる大溝が寺域を囲み、その規模は南北約180m、東西約170mに及び。遺物についても、大永年間の銘が刻まれた瓦や仏具などが確認でき、質・量ともに充実する。この頃、明和町岩内の出身ともいわれ雪舟とも関わり深い庵桂悟(仏日禪師)が住職となっており、この時期に隆盛を迎えた可能性がある。

私が安養寺跡をご紹介しますのは、平成25年(2013)に明和町役場へ入庁し初めて担当した調査現場で思い出深い遺跡だからだ。一年目で発掘調査のイロハもわからず、上司や先輩からのサポートや教えのおかげで乗り切った現場で、苦い経験ばかり思い



▲初めての現地説明会となった第6次調査

出される。しかし、今回寄稿の機会を得振り返ってみると、この時に得られた経験が現在の業務に活かされていることばかりだと気づかされる。今回は安養寺跡の調査を通じてどのようなことを学んだか、私的な経験話を綴ることをご容赦願いたい。

### 1. 調査の前に

安養寺跡の遺跡範囲の小字名は「寺屋敷」となっており、地名からも寺の存在をうかがい知ることができる。さらに興味深いことに、調査で見つかった寺域を囲っていた大溝のラインと小字名の字界のラインが見事に一致することもわかってきた。また、明治期の地籍図からは、伽藍が衰退した後の寺域内の地割の状況や開山塔の位置などもおおよそ知ることができた。調査に臨む際、周辺地域を含め過去の発掘調査報告書から情報を得ることは当然だが、考古学に限らずさまざまな情報を多角的に得ることで、調査の際の視野が広まることを学んだ。

### 2. 文字資料、有形文化財との融合

安養寺は近世に伊勢街道沿いに移転し、今も法灯を伝え続けており、三つの県指定有形文化財が今も伝えられている。「紙本墨書癡兀大恵印信附紙本墨書空然印信」・「紙本墨書安養寺文書」、もう一つは「仏通禪師所用法衣並びに伝来什物」である。まず、文書史料からは、発掘調査を行った安養寺跡を舞台に具体的な僧の名前が分かるとともに、北畠氏などどのような関係性を形成していたかの一端を知ることができる。次に什物からは、法灯継承の証としていかに開山の癡兀大恵が重要視されたかが分かるとともに、貴重な品々を守り伝えた建造物が発掘調査を実施した中に含まれていたかもしれないと考え、興味が尽きない。中でも「頭陀袋」の内側には開山癡兀大恵の示寂について「正和元年壬子十一月/二十二日寅時於/安養寺方丈/東二間御坐化」のように記されており、いつ、どこでが明確になっている。この示寂の場所は、発掘調査を行った場所にあったはずなのである。明和町のような都を離れた地方であってこれほど明瞭に有形資料と結びつく発掘調査はなかなかないだろう。見つかった遺構、出土した遺物とともに幅広い文化財を意識しながら調査を進める楽しさと難しさが安養寺跡の調査にはある。

### 3. 住民とともに

しかし、これらの貴重な文化財を現代の我々が目にできるには、様々な危機があった。一つは前述した織田氏の伊勢侵攻の兵火であり、もう一つは明治期の廃仏毀釈である。明治期には一時地元住民の土蔵で保管されたこともあったという。また、地元自治会には近年まで開山癡兀大恵の命日に合わせて「開山講」が行われ、地域と濃密なつながりがあった。平成27年に安養寺跡をテーマに企画展「安養寺跡を探る」を開催した。展示解説会を実施したところ、地元自治会から大勢の方にお越しいただき、安養寺への関心の高さを目の当たりにした。行政が調査でわかった情報を地元と共有し、文化財が地域の資源として地域を勇気づけることを、身をもって体感できた。これからも住民さんの顔を思い浮かべながら、分かりやすく丁寧な情報発信を肝に銘じて、今日も文化財保護業務に従事していきたい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは中澤郁巳さんです。

## 考 古学者の書棚

## 「釈迢空全歌集」

折口信夫 著、岡野弘彦 編 / KADOKAWA(2016)

牧野 令

## はじめに

「錘をつける」と聞いて皆さんは何を思い浮かべるだろうか。考古学関係者であれば、発掘調査における平板測量の下げ振りを思い浮かべる人は少なくないだろう。あるいは、「錘を垂らす」と言い換えれば、セクション図をとっている場面を思い浮かべる人もいるかもしれない。

この言葉は、宮中歌会始や朝日新聞の歌壇などで選者を務める細胞生物学者で歌人の永田和宏が、氏のご息女と同じく歌人の永田紅の言葉を引用する形で著書や講演会の中で繰り返し述べられている言葉で、「五・七・五・七・七」の31音からなる日本独自の定型詩である短歌を作ることを端的に言い表している。正確には「短歌を作ることは、時間に錘をつけること」という内容で、「歌を作ることによって切り取った時間が、その他大勢の忘れ去られていく時間とはちがった、特別なものとして自分の人生の時間のなかに定着していく」といった文脈で語られる。

遺跡の発掘調査で錘を垂らすのは、その場所にある痕跡を読み取るために何も無い空間に特定の測量点を設けるために行う行為である。偶然にも以前の職場で永田和宏の講演会を聞く機会があり、「時間」と「空間」という違いはあるものの、何も無いところに特定の点をつくるという行為の共通点をもって、なんとなく短歌の一側面を理解した気になり、俄かに短歌というものに親近感を覚えた。以来、歌集を購入しては折々に手に取り、ぱらぱらとページをめくっている。

## 折口信夫の短歌

今回本を紹介するにあたっては、考古学に関連性があるものということで『釈迢空全歌集』を取り上げさせていただくこととした。釈迢空(しゃくちょうくう)というのは民俗学者の折口信夫の雅号である。折口は國學院大學や慶應義塾大学で教授を務め、折口自身の学術的な功績はもとより、折口に師事した研究者の中に、弥生時代の登呂遺跡や縄文～古代の集落遺跡である平出遺跡、方形周溝墓命名の契機となった宇津木向原遺跡など幅広い時代の調査・研究を手かけた國學院大學教授の大場磐雄がいることから、釈迢空という名前に聞き覚えがなくても、折口信夫をまったく知らないという考古学関係者はほとんどいないのではないかと思う。

本書は歌人・折口信夫(釈迢空)が刊行した『海やまのあひだ』『春のことぶれ』『水の上』『遠やまひこ』『天地に宣る』『倭をぐな』の6冊の歌集、私家版の『安乗帖』『ひとりして』の2冊、さらには歌集に収録されなかったものも含めて4,300首を超える作品がおよそ600ページにわたって掲載されている。気が向くままに手に取り、その都度適当にページをめくっていく読み方なので、すべての歌に目を通したのかは自分自身でもよくわからないがそのうちの何首かを紹介したい。

折口の短歌の大きな特徴のひとつには、句読点や1字空けの多用ということが挙げられる。これは表記の方法なので、歌の内容について論評できるほどの知見が備わっているわけではない私にも一目でわかる。本書の冒頭2首目に置かれた折口の代表歌を取り上げてみよう。

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり  
釈迢空『海やまのあひだ』

短歌は「葛の花踏みしだかれて色あたらしこの山道を行きし人あり」と空白や句読点を用いずに表記するのが一般的で、使用する際には部分的な強調やリズムの調整、時間の経過や場面転換などを表現する詩的効果を狙って用いるか、読者の読解を容易にするために用いることがほとんどであるように思う。折口は、この表記の方法について『海やまのあひだ』のあとがきに、「文字に表される文学としては当然とるべき形式」として、「自身の呼吸や、思想の休止点を示す」ことの必要性を説いている。

せっかくなので、この歌の内容にも触れておきたい。民俗学者である折口は、さまざまな土地の営みや習俗を求めてフィールドワークに出かけることが多いので、行った先で出会った人々の暮らしや情景を詠んだ旅の歌も多く、この歌もそのひとつである。葛はつる性の多年草で、山の斜面一帯が覆われている場面を目にすることもある。夏には赤紫色の花をつけるが、その色が踏みしだかれてより鮮明になっており、その色の新しさに自分よりも前にこの山道に分け入った人の存在を感じることができるとい内容となっている。1字空けの効果もあり、静寂な山の中の孤独感を感じる歌である。有名な歌なので多くの評があるが、冒頭で紹介した歌人の永田和宏は「葛の花の踏みしだかれた様子から、先に行った人を推理するといった歌ではなく、どこかしんと寂しい人間の営みといったものが浮き出てくるような一首である」と鑑賞する。私個人としては、情景を詠いながらも、孤独感を感じる中で先達がいることが心強くもあり、自身も自分なりに道を切り拓こうとする決意のような心情を詠んだ一首だと感じている。

また本書には、遺跡そのものを詠んだ歌も収録されている。

## 平出の村をめぐるてほりあげしむかしのいへのあとどころ見つ

これは昭和25年11月24日に詠まれたもので、近隣の村に講義で訪れていた折口は、平出遺跡の発掘調査委員長を務める弟子の大場磐雄のもとを訪ね、発掘現場に足を運んだようである。歌としては、「平出遺跡を訪れて古代の住居址を見た」というなんということのない歌ではあるものの、折口が錘をつけた時間のひとつとして残っていることは、いま現在平出遺跡に携わる人間として素直に喜ばしく感じる。

## 短歌のすすめ

最後に、自作の拙歌を一つ。

## あの夏の海岸沿いの民宿のぬるいビールとひとひらの雲丹

これは、学生時代に毎年参加していた発掘調査の宿での風景を詠んだものである。人に見せるには恥ずかしいばかりの歌ではあるが、この歌を作ったことで、当時の記憶が鮮明なイメージとして保存された気がする。正に時間に錘がついたのだ。

記憶は時間の経過とともに土層のように堆積し、そのときどんなイベントが起こったのか読み取るのが困難になっていく。時間という物差しに「短歌」という錘をたらし、人類の過去だけでなく自分自身の過去を振り返ってみるのはいかがだろうか。

## アルカ通信 No.247

発行日 2024年4月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801  
長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp  
URL : http://www.aruka.co.jp